

- 小豆地域は国内最大のオリーブ産地を形成しているが、生産者間の果実品質のバラツキ、産地拡大に伴う採油粕、剪定枝葉の処理が課題。
- このため普及センターでは、チェックシートによる個別濃密指導、剪定枝葉の堆肥化など、未利用資源の有効活用に取り組む。
- これらの取組みの結果、オリーブの栽培面積は平成23年度110haから、平成26年度には133haに増大するなど、産地拡大に貢献。

具体的な成果

1 チェックシートによる個別濃密指導

- 生産者の「気づき」を引き出し、栽培技術のレベルアップが図られるとともに取組み農家数が増加

■ 取組み農家数

- ・H25年度;22
- ・H26年度;25
- ・H27年度;29



2 剪定枝葉の有効活用

- 安定した堆肥生産技術を確立し、未利用資源の有効活用を図る

- ・堆肥生産量;90m³
(平成27年度)
- ・活用;小豆島オリーブ公園内のほ場、アムスメロン生産農家



3 オリーブ採油かすの飼料化

- 牛の嗜好性に合った最適な飼料化
- 乾燥機の導入支援により、良質なオリーブ粕飼料を効率的・安定的に生産

■ 小豆島オリーブ牛生産頭数

- ・130頭(平成23年度)
- ↓
- 148頭(平成26年度)



普及指導員の活動

平成22年度～継続中

- 採油量の増加につれて増大する採油粕を、牛の嗜好性にあった飼料に仕上げるとともに、効率的・安定的に飼料化するため、乾燥機の導入を支援。

平成23年度～継続中

- 栽培面積の拡大につれて増大する剪定枝葉の有効活用のため、堆肥化に取り組む。

平成25年～継続中

- 多様な園地の状況や生産者のレベルに対応し、栽培技術の向上と生産量の増大を図るため、チェックシートによる個別濃密巡回を開始。

普及指導員だからできたこと

- ・農家に対して一方的に提言するのではなく、共に考え、農家の「気づき」を引き出す。
- ・日ごろからの関係機関等との連携を活かし、必要な場面に応じた関係機関を結びつけ、それぞれの専門分野を活用し、迅速な課題解決に結び付ける。

オリーブ生産振興の取組み

活動期間：平成22年度～継続中

1. 取組みの背景

小豆管内では、本島の南側や豊島を中心に約141haのオリーブが栽培され、国内最大のオリーブ産地を形成している。栽培者数は194戸で、経済栽培されている面積の過半は特定法人（平成15年のオリーブ振興特区の認定法人）、農業生産法人及び数件の大規模生産者（1ha以上）で占められている。

近年では、定年退職や島外からの移住によりオリーブ栽培に取り組む新規生産者も増加傾向にあり、将来の産地を支える担い手として期待されている。

オリーブは近年の栽培ブームと重なって、小豆島に限らず栽培面積は全国的に増加傾向であるが、国内需給量はまだまだ不足している。

このような中、小豆島においてもネームブランドに慢心することなく、トップブランドとして維持・発展を図るためには、面積拡大とともに生産者全体の技術レベル向上を図る必要がある。

一方で、オリーブは収穫に代表されるように手作業が多く大規模経営が難しいほか、新規就農者の増加に伴い生産者間の技術格差が生じ、果実品質にバラつきが発生するなど、技術的な課題がある。更に、産地拡大に伴うオリーブ果実の採油粕（残渣）の増大や、剪定した枝葉の処理など長期的に検討が必要な課題も多い。これら課題の解決が、安定的な産地形成および経営体の育成には不可欠であった。このため、県関係機関をはじめ町やJ Aと役割分担のもと、普及センターでは栽培技術習得の支援や現場の技術課題解決支援を行うとともに、増大する採油粕や剪定枝葉の利活用対策についても取り組むこととなった。



チェックシートによる個別巡回の様子

2. 活動内容（詳細）

（1）チェックシート活用による個別巡回指導

生産者全体を対象とした栽培講習会は、年内に、初心者とベテランに分けて行う技術研修会と、冬季の剪定講習会を合わせて3回、開催している。しかし、園地の特徴や生産者レベルは多様であり、一方的な全体講習会ではきめ細かな対応に限界があった。このため、個別指導を希望する生産者の巡回指導を開始した。これは、町を窓口希望者を募り個別にチェックシートを作成、主要な

作業時期にあわせて年4回（開花後：6月、生理落果後：7月、収穫前：9月、剪定後：4月）、定期的に巡回指導を行うものである。

（2）オリーブ採油粕の飼料化

採油後のオリーブ粕は渋みが強く、そのままでは牛が食べないことから、土庄町の石井正樹氏が天日で乾燥したところ、牛は好んで食べるようになったが、すべてが手作業であり非常に労力を要していた。

そこで、飼料を効率的・安定的に生産するため、平成22年度に「かがわ農商工連携ファンド事業」との連携により、乾燥機の導入整備を支援した。

（3）剪定枝葉の有効利用

オイルの採油粕の有効利用方法としては、牛等の畜産飼料への転換を加速させたが、剪定時に発生する枝葉は、焼却・粉碎もしくは野積み等に限られ、適正処理が課題となっていた。

そこで、一般財団法人小豆島オリーブ公園（以下オリーブ公園）をはじめとした関係機関と連携し、数年間の試行錯誤の結果、安定した堆肥生産が可能となった。これにより、枝葉の堆肥化による環境に優しい循環型農業を支援した。



堆肥化プロジェクト検討会の様子

3. 具体的な成果（詳細）

（1）生産者の技術レベル向上

全体講習会で基礎知識の向上を図るとともに、チェックシートを活用した個別巡回指導により、園地個々の状況把握と対策を施し、生産者に「気付き」の大切さを実感させた。

なお、永年性作物であるため、解決に複数年を要する課題も多いことから、次年度以降も継続して支援を行う。

（2）オリーブ採油粕の飼料化

関係機関の連携した指導によって、肉質等級4ランク以上の上物率が22年度は52%であったが、25年度上半期は72%となり、肥育成績が大幅に向上した。

また、平成24年に開催された第10回全国和牛能力共進会では、「小豆島オリーブ牛」が優等賞を受賞した。

関係機関が「小豆島オリーブ牛」をPRしてきた結果、その知名度が向上するとともに「脂があっさりしている」、「柔らかい」と肉質の良さも評価され、



導入した乾燥機

マスメディアに取り上げられた。そして、「小豆島オリーブ牛」の取組が県下一円に広がり、讃岐牛に付加価値をつけた「オリーブ牛」が誕生し、定着した。

(3) オリーブ堆肥を使った循環型農業の実現

材料となる剪定枝葉は、オリーブ公園ほか、町広報誌等で個別生産者および企業に呼びかけ無償で引き取り、収集した。

平成27年産は剪定枝葉約90m³分の堆肥ができ、その堆肥はオリーブ公園内のほ場で施用されたほか、苗木とのセット販売、堆肥を使った野菜づくり等への利用も検討されている。このほか、J A部会等を通じて、メロンやアスパラガスへの試験栽培も始まるなど、新たな付加価値商材づくりに向けて着実に動き出している。

4. 農家等からの評価・コメント

(1) チェックシート活用による個別巡回指導（J A香川県小豆島果樹部会オリーブ班）

研修会などではなかなか質問しにくく、電話などでは自分の園地の現状をうまく伝えられないので、実際に自分の園地に来てもらい説明を受けるのは解りやすい。2年連続で指導を受けたが、園地が昨年より明らかに良くなった。

(2) オリーブ採油粕の飼料化（東洋オリーブ(株)）

いったいどのように乾燥すれば牛が食べてくれるのか未知の世界であったが、普及センターのリードの下、乾燥方法と牛の嗜好性を分析し、最適な乾燥機を選定や、導入にあたって補助事業の活用など、適切なアドバイスにより順調な飼料生産が継続できている。

(3) オリーブ堆肥を使った循環型農業の実現（J A香川県小豆島果樹部会オリーブ班）

樹の生長とともに剪定後の枝葉の排出量が多くなり、その処理に苦慮している。今回の手法を農家でもできるように改良し、枝葉を粉砕するチップターのリース、運搬が困難な高齢者のための回収方法などを検討されたい。



堆肥の配布作業の様子

5. 普及指導員のコメント

（小豆農業改良普及センター 主席普及員 藤田則久・主任 豊嶋貴司）

小豆島のオリーブ産地が、日本のトップブランドとして維持・発展を図るためには、産地の拡大と安定生産、高品質な原料から生産される魅力ある商品など、生産から加工・販売までのすべての過程においてトップレベルが要求される。

新規就農者の確実な定着と早期の技術のレベルアップ、近年多発する病害虫への対応、大規模経営者の経営安定などによりこれを守っていききたい。

6. 現状・今後の展開等

近年のオリーブブームも追い風となり、関係機関・団体等との連携による振興施策や各種取り組みにより、栽培面積は着実に増加している。オリーブは産業振興の面だけでなく、地域が抱える課題である耕作放棄地対策や新規就農対策にも一定の効果が認められることから、今後も継続して取り組む必要がある。

一方、生産者の技術格差是正や大規模経営化に伴う労力分散、省力化技術、病虫害被害対策など不安定な生産面の課題はまだ多い。加えて収益性向上のため、6次産業化の推進も重要な課題である。

今後は、島内課題としての視点だけでなく、県全域の振興産業として、試験研究・行政機関との連携も強化していく必要がある。